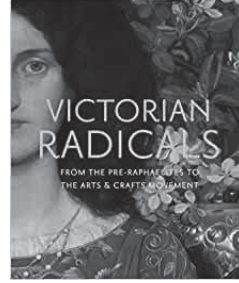


## 書 評

Martin Ellis, Timothy Barringer, and  
Victoria Osborne, *Victorian Radicals:  
From the Pre-Raphaelites to the Arts & Crafts  
Movement*  
(Munich: Prestel, 2018)



海老名 恵

本書は2018年11月にオクラホマ・シティ美術館を皮切りに、本来ならば、今頃は全米を巡回中であるはずの展覧会、“Victorian Radicals: From the Pre-Raphaelites to the Arts & Crafts Movement”（本書と同タイトル）の図録である。2020年に入って新型コロナウイルス感染症の流行のため展覧会の予定が大幅に変更されたのだが、それについては後述する。バーミンガム・ミュージアムズ・トラスト（以下BMTと略）とアメリカン・フェデレイション・オブ・アーツの協力により実現されたこの展覧会では、200点あまりの作品が展示され、そのほとんどはBMTによって管理され、初めて英国外に持ち出されるものも多い。

“By the gains of industry we promote art” (17)「われわれは産業で成し得た財により芸術を発展させる。」バーミンガム博物館・美術館（以下、バーミンガム美術館と記す）入口に据えられた礎石にはそのモットーが刻まれている。英国を代表する都市のひとつ、バーミンガムは、18世紀後半に始まった産業革命の恩恵を受け、工業、商業、貿易で発展した。こうして得た財源をもとに、19世紀に入ると市は地元の有力者たち（ほとんどが成功を収めた中流階級、新興の産業資本家）からの寄付も加え、美術館オープンの1885年に先んじて1860年代から徐々に作品購入を始めてきた。現在では、芸術、歴史、自然科学、科学、産業などさまざまな領域にわたるコレクションを有しており、特にエドワード・バーン＝ジョーンズの作品を筆頭にラファエル前派の作品が充実している。自治体主導で質の高い芸術

作品の蒐集が進められ、それらは「バーミンガム・コレクション」として広く知られるところとなった。

「ラファエル前派からアーツ・アンド・クラフツ運動まで」と副題にあるようにラファエル前派からラファエル前派第二世代、さらにアーツ・アンド・クラフツ運動に至る「三世代」のストーリーを通じてヴィクトリア朝の芸術と社会、産業との関係を考える試みが、英国と同様に産業都市の形成に成功を収めた合衆国で行われることの意義は大きい。

「ヴィクトリア朝」と「ラディカル」、一見、矛盾しているとも思えるキーワードを本書はタイトルに冠している。ヴィクトリア朝ミドルクラスの重要な規範、「リスペクタビリティ」の観念に照らすと、急進的な思想の持主は歓迎されなかった。しかし、産業資本主義や社会構造、環境破壊に異を唱えた者たちが中流階級のなかにも少なからず存在しており、彼らに最も影響を与えた人物がジョン・ラスキンである。芸術の観点から社会批判を行ったラスキンはラファエル前派からアーツ・アンド・クラフツ運動にいたる一連の芸術家たちに刺激を与え、その結果、「ラディカル」な作品、思想が生まれた。

本書は3人の執筆者、元バーミンガム美術館学芸員のマーティン・エリス、イェール大学教授のティム・バリンジャー、BMT学芸員のヴィクトリア・オズボーンによって書かれている。カバーにはバーミンガム出身の女性画家、ケイト・エリザベス・バンス(1856-1927)の油彩画《音楽》(1895-97)が採用されており、バーン＝ジョーンズの作品が敢えて用いられなかったところに本書テーマの狙いが窺える。構成は一般的な図録と同様に二部から成る。第一部は解説と執筆者3名によるそれぞれのエッセイである。第二部には展示作品の図版が収録され115点すべてに解説文が付されている。

第一部、解説では、エリスが「『われわれは、産業で成し得た財により芸術を発展させる。』：バーミンガム・コレクション」と題し、バーミンガムの歴史とコレクションの成り立ちについて述べている。市は、時代とともに常に変化、発展し文化の受容層を広げながら独自のアイデンティティーを確立してきた。美術館は「ラスキンが工業化、脱人間化、自然破壊を糾弾したにもかかわらず、産業都市バーミンガムにラスキンの思想の持主たちによってつくられた」(33)。彼らはラスキンを信奉する「産業資本家」

たちであった。まさに美術館のモットーがバーミンガムの歴史と芸術環境を表象している。

最初のエッセイ、バリンジャーによる「ラディカルなヴィクトリアンたち：ラファエル前派と近代社会」は「中世主義」、「兄弟団」、「リアリズム」、「ポリティクス」、「信仰」、「ジェンダー」、「ヴィジョン」、「インパクト」を切り口に「ラディカル」について論じている。資本主義、進歩が善とされていた19世紀にあって、「中世」を再考したラファエル前派の芸術家たちの斬新さ、そして「ラファエル前派兄弟団」のメンバーがロイヤル・アカデミーの教えに異を唱え、英国美術界に革命を起こしたことそのものがまさに「ラディカル」であった。ラスキンの教えに則った「自然に忠実に」描く「リアリズム」の手法をとりいれ、ヴィクトリア朝のイデオロギーに対する異議申し立て－「ポリティクス」－が作品を通して試みられている。宗教主題の作品ではキリストがリアルな人間像に置き換えられ独自の「信仰」提示がされる。さらにラファエル前派の言説においては多様な「ジェンダー」のかたちが存在し、その受容は転覆、破壊のイメージを伴う。第二世代のウィリアム・モリスとバーン＝ジョーンズは、美と調和が産業資本主義や醜悪なものにとって代わる理想の「ヴィジョン」を描いた。それはケルムスコット・プレスによる「ブック・ビューティフル」というかたちで体现されたのである。アーツ・アンド・クラフツ運動の「インパクト」はその後世界各地に広がり、シンボリズムやシュールレアリスムに先んじる。バリンジャーはラファエル前派がヴィクトリア朝の人々にラディカルな問題提起をし、そして今日も鑑賞者にそれらを訴えつづけていると結んでいる。

次にエリスの「実践と理論：理想と作品、1850－1910」は装飾芸術について「ゴシック」、「ウィリアム・モリスとその周辺」、「アーツ・アンド・クラフツ運動」から論じる。ゴシック・リヴァイヴァルは宗教改革前のカトリックの精神性を復活させる手段であり「A. W. N. ピュージンにとっては革命だった」(55)。ピュージンはステンドグラスのデザインにも携ったが、鮮やかな色彩の再現にはジェイムズ・パウエル・アンド・サンズやウエア・グラス・ワークスのような商会による調査や実験が功を奏した。ピュージンの死後は、ウィリアム・バージェスのデザインが仲間のデザイナーたちに多大な影響を与えた。モリスのインスピレーションの源泉はもちろん中

世であるが、ピュージンがゴシックを魂の再生への道とみなしたのに対し、モリスはロマンスの世界への道と考えていた。1861年、室内装飾を扱うモリス・マーシャル・フォークナー商会が設立され、多くの友人たちがパートナーとして参加した。モリスの生涯の友人バーン＝ジョーンズは、ステンドグラス・デザイナーとしても名を挙げており、1862年の万国博覧会にも出品している。1881年にマートン・アビーに新たに工房を移した商会は、大掛かりなタペストリーの制作にとりかかった。その翌年、アーサー・マクマードウがセンチュリー・ギルドを、1884年にウィリアム・レサビーらがアート・ワーカーズ・ギルドをたちあげアーツ・アンド・クラフツ運動が始まった。1888年にアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会が始めた展覧会は、単なる商業的な企図ではなく一種のイデオロギー的なキャンペーンだった。チャールズ・ロバート・アシュビーが手工芸ギルド学校を設立した後、チップینگ・カムデンに移動し、実践を試みたコミュニンのヴィジョンはラディカルな社会モデルとして国内外で注目され、フランク・ロイド・ライトもその影響を受けた。デザインと制作の分割、男女間の不平等などへの不満はアシュビーのアプローチが育った結果である。ラスキン、モリス、ヴィクトリア朝の改革論者(ラディカルズ)はモノづくりのための知的コンテキストを確立した。

オズボーンの『『新しい秩序』ラファエル前派のレガシーとバーミンガムの芸術』はバーン＝ジョーンズと故郷とのつながりに注目し、バーミンガムにおける芸術の発展過程をたどる。1830年～40年代のバーミンガムは工場からの煤煙に覆われ、自身の知的欲求を満たす文化的背景が整っていない状況だったことからバーン＝ジョーンズはオクスフォード大学入学のため生家を離れて以来、長らく自身の出生地を誇りにしていなかった。故郷と積極的に関わりをもつのは「至福の7年」の後、1877年以降である。バーミンガム美術協会の会長をつとめ(1885-86)、1891年に大作《バツレハムの星》(1887-91)をバーミンガム美術館に収めた。市は1870年代から改革を進め、新しい美術館と芸術学校の建設にとりかかり、1885年、美術館は一般公開されるようになる。1900年頃にはラファエル前派の絵画のコレクションが充実する。バーミンガム出身のジョゼフ・サザールとアーサー・ギヤスキンはバーン＝ジョーンズの教えを受け、ギヤスキンはチャー

ルズ・ギアとともにケルムスコット・プレスでの書物制作にも関わった。1903年、R. カターソン＝スミスがバーミンガム・セントラル・スクールの校長となりアーツ・アンド・クラフツの理想をさらに推し進めることとなる。このように世紀末までの「30年にわたりバーミンガムは芸術復興の時代を経験し」(87)、市民の美術館はラファエル前派のコレクション、研究の中心としての地位を固めた。

第二部は4つのテーマに分類される。「最初の産業国家」はラファエル前派以前の絵画作品と産業革命によって出現した製造会社による製品である。1851年の万国博覧会に出品されたジョン・クロスリー・アンド・サンズのカーペット(1851)(図版9)も収録されている。「ラファエル前派アヴァンギャルド」はバーミンガムが所有するラファエル前派の作品群だが、そのコレクションの豊富さに圧倒される。2014年、日本で開かれた「ラファエル前派展」の副題が「ヴィクトリア朝のアヴァンギャルド」であったことを思い起こした方も多いのではないだろうか。「世俗の聖職者」では美しいステンドグラスの図版が多くみられる。バーン＝ジョーンズのデザインによるステンドグラス《聖マルコ》(1883)(図版66)は、ボストンで開かれた展示会で人気を博した作品である。「新世紀のユートピア」ではアーツ・アンド・クラフツ運動に携わった芸術家たち、追隨者の作品をとりあげる。表紙を飾る《音楽》(図版104)には、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティやシメオン・ソロモンの影響が認められる。

バーミンガムはバーン＝ジョーンズの生地であるのみならず、1880～90年代には革新的な芸術家たちを輩出した都市である。その市が所有するコレクションがまとまったかたちで図録として出版されたことは美術的にのみならず、歴史的な観点からも価値のある一冊だといえる。19世紀にはその地に多くの工場や工房があったことも幸いし、貴重な作品が残されている。詳細な解説を読み進めると新たに知ること多かつた。そういった意味でも図版を眺め「絵を読む」だけでなく資料として読むに足る一冊である。

当初の予定では、この展覧会は2018年10月11日から足掛け3年、2021年1月にペンシルヴァニア州ピッツバーグのフリック芸術・歴史センターにて終了することになっていた。しかし、2020年の新型コロナウイルス感

染症の流行により、各地の美術館は閉鎖され、予定は大幅に変更されている。かくいう私も3月初旬にイエール大学英国美術センターにて鑑賞するべく旅程を組んでいたが、ニューヨークでの爆発的感染のため止む無くキャンセルした経緯がある。

イエールでは開催中の3月半ばから閉館、そして次の開催地、ネヴァダ州リノのネヴァダ美術館は開催期間を2020年6月～9月から2021年3月～5月に変更している。最後の地、ピッツバーグでは「2021年秋」とだけ提示されている。果たして来年、無事に再開できるのかもわからないところではあるのだが。このような状況下、本書を繙き、想像力を駆使して「バーチャル展覧会」を堪能してみてもどうだろう。しばし電子機器から身を遠ざけて。

——日本女子大学非常勤講師